

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20330161

研究課題名（和文） マナーと人間形成に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文） Theoretical and substantial study on manner and human being formation

研究代表者

加野 芳正 (KANO YOSHIMASA)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：00152827

研究成果の概要（和文）：マナーに関する理論研究と実証的研究を平行して進めてきた。その結果、以下のような知見が得られた。（1）法律や道徳と比較したときにマナーは独自の領域を構成している。（2）マナー（あるいは礼儀作法）は人と人を結びつけ、公共的な社会に参加していく上で不可欠なものである。（3）マナーは文明化や社会の近代化とともに私たちの社会に出現してきた。（4）日常生活におけるマナーとしては挨拶を重視する人が多い、また、家庭でのマナー教育に焦点を絞れば、食事の場面を重視する人が多い。（5）どのようなマナーが求められるかは、文化によって規定されている。

研究成果の概要（英文）：We pushed forward the theory study on manner and a substantial study. As a result, the following knowledge was provided. (1) When I compared it with a law and the morality, the manner constitutes an original domain. (2) The manner (or manners) joins a person and a person together and is indispensable in participating in the public society. (3) The manner (or manners) joins a person and a person together and is indispensable in participating in the public society. (4) There are many people making much of greetings for a manner in the everyday life and there are many people making much of the scene of the meal if I narrow down a focus to manner education at the home. (5) It is prescribed what kind of manner is important by culture.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2009年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	5,600,000	1,680,000	7,280,000

研究分野：教育社会学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：マナー、礼儀作法、エチケット、文明化、近代化、あいさつ

1. 研究開始当初の背景

マナーとは、ヒトが自己あるいは他者の持

つ動物性の次元になるべく直面しないで
むように作り上げた身体技法で、多くは「し

つけ」を通じて身体化される。研究開始当初の背景としては、(1) マナーについては、いまだ十分な研究が存在しておらず、教育学の研究課題として位置づけて開拓していく必要があること、(2) マナーは表面的な出来事と考えられることがあるが、実は、人間形成にとっての重要な実践的課題であること、(3) 「マナーの悪さ」という言葉で日常的に問題にされており、とくに若者のたちのマナー行為に人々の厳しいまなざしが注がれており、この点を実証的に明らかにしていく必要があること、の三点が指摘できる。

2. 研究の目的

本研究は以下の4点を明らかにしておくことを目的としている。

(1) 人間形成におけるマナーの問題

マナーの悪さが繰り返し社会問題となり、マナーに反する振る舞いは人々を不愉快な気分させるが、犯罪のように社会秩序の根幹を揺るがすことでもなければ、道徳に反する行為のように人間性の本質に及ぶテーマでもない。しかし、マナーの問題は私たちにとって表面的な問題ではないこと、そもそもマナーの精神とは何であるのかを人間形成の問題として明らかにする。

(2) 型としてのマナー（礼儀作法）の変質と衰退

明治期以前の人間形成にとっては「型」の体得こそが重要であった。そのための「稽古」「芸道教育」の思想は、伝統的教育の中で再評価すべき教育観である。西欧文化との出会い、天皇制国家の確立、世間というまなざしの衰弱、価値多元社会という文脈のなかで、マナーや礼儀作法がどのように変質し衰退していったのかを、近代日本における人間形成の問題として明らかにする。

(3) 文明化、社交、権力、暴力とマナー
ドイツの社会学者エリアスの『文明化の過程』によると、マナーの出現は近代人＝今日の大人を生み出し、マナーを知る大人と未だマナーを知らない子どもという、大人と子どもとの差異を生み出した。そして、子どもに作法を教えるための礼儀作法書が出版されるようになった。そのマナーは、その人柄と品性を映す鏡となる。このことはマナーの存在が、階層的、身分的なものであることを意味する。18世紀末の社交性をめぐる理論（クニッゲ、シュライアーマッハー、カント）、ジンメル、ゴッフマン、ブルデューらの社会学理論を検討することによって、マナーがも

っている〈人々をつなぐ〉機能と〈差異化する〉機能を明らかにしていく。

(4) マナーの育成と形骸化に関する実証的研究

若者を中心として、公共の場でのマナーについてどのような意識を持ち、迷惑行為に対してどのように感じているのか。とくに、公共空間（教室、公共交通機関、成人式の場など）における若者のマナー行為について、参与観察、エスノグラフィー等によって明らかにしていく。他方で、マナーを身につけるための取り組みも行われている。学校現場においてマナー教育がどのように実践されているのかを中学校・高等学校に対するアンケート調査によって明らかにしていくとともに、マナー教育に先導的に取り組んでいる学校に対する訪問調査を行う。

3. 研究の方法

本研究は、大きくは理論的研究と実証的研究の二つに分かれる。

(1) 理論研究。10人の共同（連携）研究者がマナーに関わる個人的テーマを持ち、適宜、合宿をともなった研究会を開催し、ディスカッションによって各人が持つテーマを深めて、それを論文として発表する。

(2) 実証的研究。教育社会学者を中心として調査班を編成し、マナーの今日的位相と、学校教育や社会教育におけるマナー教育の実証的な研究を遂行する。

① 大学生への質問紙調査

大学生2500人を対象としたマナーに対する意識と行動、マナー教育に関するアンケート調査を実施する。

② 新聞におけるマナーとエチケット記事の分析

新聞のマナー関連記事を経年的にたどりながら、マナーがどのように取り上げられ、語られてきたのか、マナーとエチケットの二つのキーワードをもとに、分析していく。

③ 若者のマナーに関するエスノグラフィー研究

公共空間における若者のマナーについて参与観察を行う。特に電車や教室などにおけるマナー行為、乗り物における携帯電話、場所取り、ジベタスワリなどについて分析を行う。

④ マナーの表象分析

マナーは日常実践の問題であり、マナーを守ろうという呼びかけは、ポスターや看板、あるいは公共広告機構のCM等となって表象される。これらを収集するとともに、分析していく。

4. 研究成果

(1) 理論的研究について

10人で進めてきた理論研究(個人研究)については、単行本(『「マナーと礼儀作法の人間学; 仮題』)として出版するべく、さらに継続して研究を進めている。これまでに積み上げてきた研究テーマを4つの柱のもとに並べると以下の通りである。

- ① マナーと礼儀作法をめぐる原理的考察—人はなぜマナーを必要とするのか
教育学にとってのマナー研究の意義について／「あいさつ」の超越性について／世界市民の作法としての歓待と弔いのマナー／近代西欧社会における社交性とマナー
- ② 文明化・近代化とマナー
文明化の過程とマナーの誕生／マナー書にみる内容の変遷について／近代学校教育の成立と欧米礼儀作法の導入／日本の近代化とマナー問題—マナー、エチケット、ルール
- ③ 現代社会におけるマナーの諸相
現代社会におけるマナーの諸相／社会関係としてのマナー／マナーと身体—スポーツ、マナー、フェアプレイ
- ④ 学校教育におけるマナー
マナーにおける〈教える—教えられる〉関係について／学校にマナー(江戸しぐさ)を取り入れる実践の意義と可能性／大学生・若者のマナー意識とマナー行動

(2) 実証的研究について

- ① 19大学、約2500人を対象と学生調査から以下のことが明らかになった。
 - ・授業中に物を食べる、ガムをかむという行為については、してはいけないという規範意識が強く、そうした行為は全体としては行われていない。他方、私語や居眠り等、授業中に授業を受ける以外の行為をすることには概して抵抗感がなく、そうした行為を行っている」と回答した学生も全体の半数以上に及ぶ。
 - ・バイトに遅刻することを絶対にいけないと

考える学生は7割以上存在するが、授業に遅刻することを絶対にいけないと考える学生は1割程度である。その意味で、大学という空間はマナー違反、ルール違反に寛容な社会だと学生たちは認識している。

- ・公共の乗り物(バスや電車)に乗るときには並ぶ、高齢者や妊婦などに席を譲るなどのマナーについては、大半の学生が実践しており、マナーを守らなければならないと考えている。

- ・友だちに対するマナーには、待ち合わせに遅れるときは電話やメールを入れる、親しい友だちの秘密については口外しないといった、守らなければならないマナーと、メールを早く返信する、誕生日にはメールを送るといった、人間関係の潤滑油として機能するマナーがあることが理解できた。

- ・学生たちの他の世代に対するまなごしは厳しく、世の中の人々がマナーを守っていると考える学生は6割程度であった。大学生のマナーは悪いと言われるが、大学生は他の世代のマナーに批判的である。

- ・バイトに遅刻しない、公共の場でつばを吐かない、二股交際はしないようにしている、ぶつかったら謝るようにしている、年上の人には敬語を使うようにしている、ちょっとした親切を受けたら「ありがとう」というようにしている、といった日常生活における行動は、学生の9割以上が「あてはまる」と回答している。その意味で、大学生はマナーの優等生であるともいえるのではないか。この点は世代間比較が求められる。

- ・キャンパスの中での嬉しいマナーとしては、「すみません」「ありがとう」などの声かけ、食堂や図書館の席が埋まっているときに詰めて座る、あいさつ等が挙げられ、逆に腹の立つマナーとしては、喫煙、歩きタバコ、私語、「ありがとう」「すみません」を言わない等が挙げられている。

- ・KH Coder 2を使用した自由記述分析からは、マナーの基本的な内容として挨拶が位置づけられること、家庭でのマナー教育では、食事の場面が中心になっていることが明らかになった。

② 新聞調査からの分析

マナーとマナーの類語である「エチケット」を比較してみると、戦後から高度経済成長期にかけてはエチケットの使用頻度が多かったが、それ以降、マナーという言葉が多く使用されるようになった。

- ・マナーとルールの円環的な関係がある。マナーで律しきれない問題(例えばゴミ出し違

反)を、ルール化や罰則で解決しようとする場合、再びマナー問題へと回帰しやすい。こうした問題を、新聞記事から明らかにすることができた。

・SPSSテキスト分析用ソフトを使用して、マナーとエチケットに関する新聞記事の内容分析を行った。

③ マナーと教育実践の問題について

〈江戸しぐさ〉を取り入れる実践について。マナー教育やマナー指導を行うことが目的ではなく、学校を公共空間として育てていくためにマナー実践を(江戸しぐさを学ぶ)取り入れる。そして、そこで生まれた公共空間のなかで、マナーを育てるという実践の意義を分析していった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

- ① 古賀正義 非行少年の「セカンドチャンス」を構築する教育実践—カリフォルニア・ティーンコートに関する参与観察研究から—、教育学論集 第53集(中央大学教育学研究会)、2011年3月、25—54頁、査読無
- ② 加野芳正 臨教審以降の教師教育政策の検証、日本教師教育学会年報、第19号、2010年10月、8-17頁、査読有
- ③ 加野芳正 新自由主義＝市場化の進行と教職の変容、教育社会学研究 第86集、2010年6月、5-22頁、査読有
- ④ 西本佳代、村上光朗、古賀正義、越智康詞、松田恵示、加野芳正、大学生のマナーに関する実証的研究(上)、香川大学教育学部研究報告 第I部第135号、2011年3月、23-40頁、査読無
- ⑤ 中西公子、加野芳正、情報化・消費社会のなかの高校生(下)、香川大学教育学部研究報告 第I部第132号、2009年10月、43-58頁、査読無
- ⑥ 中西公子、加野芳正、情報化・消費社会のなかの高校生(上)、香川大学教育学部研究報告 第I部第132号、2009年10月、27-41頁、査読無
- ⑦ 加野芳正、教職大学院の課題、IDE—現代の高等教育、No. 512、2009年7月、

40-45頁
査読有

〔学会発表〕(計5件)

- ① 加野芳正、越智康詞、村上光朗、西本佳代、矢野智司、湯川嘉津美、鳶野克己、古賀正義、毛利猛、櫻井佳樹、松田恵示、マナーの教育学的研究、日本教育学会第69回大会、広島大学、2010年8月21日
 - ② 加野芳正、鳶野克己、西本佳代、古賀正義 マナーと人間形成、日本子ども社会学会第17回大会、京都女子大学、2010年7月3日
 - ③ 加野芳正、西本佳代、大学生のマナーに関する実証的研究、日本高等教育学会第13回大会、関西国際大学、2010年5月29日
 - ④ 松田恵示、若者の身体技法と「マナー意識」、日本教育社会学会第61回大会、早稲田大学、2009年9月12日
 - ⑤ 加野芳正、村上光朗、松田恵示、伴恒信、マナーの人間形成論的意味について(ワークショップ)、日本子ども社会学会第16回大会、中国学園大学、2009年7月4日
- 〔図書〕(計4件)
- ① 加野芳正、葛城浩一編著、学生による学生支援活動の現状と課題(広島大学高等教育研究叢書第112号)、2011年3月、97頁
 - ② 加野芳正 変わる家族とジェンダー観、南本長徳、伴恒信編『発達・制度・社会からみた教育学』北大路書房、2010年4月、13-23頁
 - ③ 加野芳正、葛城浩一編著、大学におけるキャリア支援のアプローチ(広島大学高等教育研究叢書第101号)、2009年3月、104頁
 - ④ 加野芳正、高等教育政策と大学教授職の変貌、有本章編『変貌する日本の大学教授職』所収、玉川大学出版部、2008年11月、43-61頁
- ## 6. 研究組織
- (1) 研究代表者
加野 芳正 (YOSHIMASA KANO)

香川大学・教育学部・教授
研究者番号：00152827

(2)連携研究者

矢野智司 (SATOJI YANO)
京都大学・教育学部・教授
研究者番号：60158037

湯川嘉津美 (KATUMI YUKAWA)
上智大学・総合人間学部・教授
研究者番号：30156814

鳶野克己 (KATUMI TOBINO)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：90411149

村上光朗 (MITUAKI MURAKAMI)
鹿児島国際大学・福祉社会学部・准教授
研究者番号：70166263

古賀正義 (MASAYOSI KOGA)
中央大学・文学部・教授
研究者番号：90178244

越智康詞 (YASUSI OCHI)
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：80242105

松田恵示 (KEIJI MATUDA)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：70239028

毛利 猛 (TAKESI MOURI)
香川大学・教育学部・教授
研究者番号：50219961

櫻井佳樹 (YOSHIKI SAKURAI)
香川大学・教育学部・教授
研究者番号：80187096

(3)研究協力者

西本佳代 (KAYO NISHIMOTO)
香川大学・教育学生支援機構・助教
研究者番号：20536768